

二階フロアの食堂では、利用者達が集まっていた。食堂の時計がまもなく三時を指そうとしている。三時は利用者におやつを提供する時間となっていた。

ステーションでは職員達が厨房から運ばれてきたおやつを利用者に配膳する準備を始めていた。本日のおやつは、吹雪饅頭で白い薄皮の所々から中のつぶし餡がのぞいている。

おやつ準備をしている塚本の視界の隅に小久保と藤田が食堂に入って来た姿を確認した。塚本は二人の移動する方向に違和感を覚え、視線を二人に向けた。二人は自分達のテーブルに向かわず、食堂の中央に向かって進んでいた。塚本は手を止め、ステーションと食堂の出入り口で二人の様子をうかがった。

二人は食堂の中央を通り過ぎ、テレビの前で止まった。

小久保が車いすの向きを百八十度変えてテレビに背を向けると、食堂を見渡すように向き直った。続いて藤田も同様に向きを変えた。

すると小久保は、右手で車いすのひじ掛けを掴み、ゆっくりと立ち上がった。半身麻痺の体だが、その動作はふらつくことなく上手くバランスを取っていた。立ち上がると右手を隣で車いすに座っている藤田の肩におき、立位を安定させた。小久保は意識して背筋を伸ばした。その容姿は何事にも動ぜず威風堂々としたもの漂わせていた。

塚本は眉間にしわを寄せた。あの二人、一体何をやる気なんだ。

小久保は食堂に集まっている利用者を見渡すと口を開いた。

「ここに集められた者達へ！」

小久保の力強い声は食堂内に響き渡り、食堂にいた利用者達が小久保に顔を向けた。

「是非聞いてほしい。君達はここの生活に違和感を覚えたことはないか。不満を感じたことはないか」

塚本は小久保の不意打ちのような言動に対して、呆然と立ちつくしてしまった。何が始まるのか理解できずにいたが、彼の硬い表情、力強い口調により、これから怒りを伴う熱弁が始まることが理解できた。また同時に小久保から近寄りがたい威圧感を受け、どう対処してよいのか判断できずにいた。

他の職員も塚本のように小久保を見つめるだけでただ呆然と立ちつくしていた。

「ここの生活がいかに窮屈なものであるかは誰もが感じているはずだ。我々は常にこの施設が決めたスケジュールによって動かされている。そこには我々の意思はないも同然。そのような環境で我々は生活を強いられている。そう感じているはずだ。起床する時間から始まり、食事、入浴、我々の中には排泄の時間も決められている者もいる。そして寝る時

間も決められている。このような環境を君達は本当に納得して受け入れているのか。集団生活だから仕方がない、そう言い聞かせ自分らしい生活を諦めてしまってもよいのであろうか！」

「でも」

小久保の右斜め前から声が聞こえた。小久保は声の方に顔を向けると、椅子に座って小久保を見つめている女性利用者がいた。

「職員さん達は私達のことを優しくお世話してくれていますし」

「優しい？」小久保はそう言うと、顔をその女性から食堂に向けた。「では聞こう！ 施設側はここでの一日の生活スケジュールを決めるにあたり、なぜここで生活している我々に意見を求めないのだ！ もし本当に私達のことを大切に考えているのなら何故私達に意見を求めない」小久保は僅かな間、口を閉ざして食堂にいる利用者達の顔を舐めるように見渡した。そして先ほど小久保に意見を言った女性利用者に顔を向けた。「それは我々の意見など必要としていないからだ。そこに真の優しさがあるだろうか」小久保すぐさま視線を食堂全体に向けた。「奴らにとって我々の言葉は一考の価値もないものとされているからだ。我々の思いを吸い上げることもなく決められたスケジュールは単なる強制である。これは支配者と被支配者の関係を如実に表わしている。これこそ権力による抑圧である！ この抑圧された世界が我々にとって当たり前前の生活と言えるのであろうか。答えはノーである。ここに入る前、我が家で暮らしていた頃の生活と比べてみたまえ」

小久保は藤田の肩で身体を支えていた右手を離すと食堂の窓に向けて指差した。「今施設の窓から外を見れば、満開になった桜が見える。日本人が魅了させられる桜の花が満開となり、春風に触れると見事な花吹雪の舞いを見せてくれている。その桜の演舞を目の前で見たいと思えば、当たり前前のように家から外に出て桜の目の前に行ったことだろう。当たり前前のように」ここで小久保は言葉を止めると、食堂にいる利用者達を見回しながらゆっくりと何度もうなづく仕草を見せた。「ここではどうだろうか。好きな時間に外に出ることができるのか、自分が満開の桜を見に行きたいと思った時、下の玄関から外に出ることができるのであろうか。答えはそう、ノーである。ここの職員に止められ、行動を抑制されてしまう。諸君！ 自由に外に出る事ができない今の生活が当たり前前の生活と言えるのであろうか。それぞれ君達のあるべき姿とは何だ。この施設で不自由に生活していることが本来のあるべき姿ではないはずだ。それぞれの当たり前前の生活がいかに人生にとって大切であるか。そして、我々にはそれを保障された生活を送る権利を持っている。しかしここ

ではどうか、この国が国民に保障している基本的人権の尊重、平等権、決定権を完全に無視しているではないか！」

「そうだそうだ！」織田が大声で賛同の声を挙げた。

小久保は織田の方へ顔を向けた。

「あなた、いいこと言うじゃねえか」織田は目を見開きながら言った。

小久保は顔を食堂に戻した。「諸君！今ここに我々の訴えを放とうではないか！それぞれが持つそれぞれのあるべき姿、当たり前前の生活を取り戻そうではないか！我々の権利を取り戻す為に施設との話し合いを要求しようではないか！」

「今こそ！」小久保の隣にいる藤田が叫んだ。「自分達の思いの丈を声に出そうではないか！」

小久保は藤田に顔を向けた。それに気づいた藤田は小久保に笑みを浮かべながら言った。「あなたのお陰で眠れる虎が目を覚ましました」

小久保も笑みを浮かべ軽く頷いた。

藤田も軽く頷くと、顔を食堂に向けた。「思うこと言わねば腹ふくる！もうこれ以上の我慢をする必要はない！立ち上がろう！」

塚本は驚きのあまり目を見開いた。利用者のほとんどが、口を硬く閉ざし、視線を小久保から離さず真剣に聴いている。中にはうなずく者まで出始め、認知症の利用者でさえ、彼の言葉を理解し、聴き入っているように見えた。塚本は確信した。小久保さんの気だ。小久保さんの強い意志が皆に伝わっているのだ。重度のアルツハイマーを患っている利用者でさえ、瞬きを忘れるほど、小久保さんの話に聴き入っている。理解はしていないだろうが、小久保さんが漂わせる気概を感じ取り、それに共感しているように感じられた。塚本はこの場がまるで改革を志す者達の集会の場のように感じられた。

塚本はステーションの中に急ぎ足で戻り始めた。これは現場の介護職員が傾聴して対応できる問題じゃない。今の生活に対する不満が限界となり、不満が怒りに変わった者の訴えだ。塚本はデスクに置いてある電話機に手を伸ばして受話器を取り上げた。「レベルが違う」そう言うと、塚本は佐藤主任の施設内PHSに連絡した。

佐藤主任の持っている施設内PHSが鳴ったのは、彼女が参加していた業務改善委員会が終わりに、一階の廊下を歩いている時だった。

「佐藤です」

「塚本です。まだ、委員会の最中ですか」

「いいえ、今終わったところ」佐藤は廊下を歩きながら答えた。

「実は」塚本は話し始めた。

佐藤は塚本の話を書くうちに足が止まり、表情が次第に険しくなり始めた。「二人が不満を訴えているわけ」

「ええ、ただその内容のスケールが大きすぎます。これまで利用者の不満を傾聴したものと違いすぎます。すぐに来てじかに聞いてみれば分ります」

「分ったわ、すぐ行く」

塚本が電話を切ると、そばにいた鈴木が話しかけてきた。「あれって不満ですよ。私達に向けての不満ですよ」

「下手に関わらない方がいい。火に油を注ぐ羽目になりかねないかも」

「あんなに熱く語れるなんて」鈴木が感心を交えて言った。

「ただ語っているわけじゃないわ」

その声は塚本と鈴木の背後から聞こえてきた。二人が振り向くと、そこには介護職員の古賀綾子がいた。彼女は塚本の一年先輩であり、この施設に勤めて四年目になるが、それ以前は介護老人保健施設や社協で数年間介護に従事していたベテランだった。

彼女は今の状況に対して驚くこともなく、冷静に受け止めていた。「喧嘩を売っているのよ。まるで施設に対しての宣戦布告みたい……でも、何か新鮮なものを感じるわ」

塚本は古賀が言った新鮮の言葉に共感した。今までここまでの本音を聞いたことがなかった為、新鮮に感じる。塚本は小久保に対して嫌悪感を抱くことはなかった。逆に自己嫌悪に襲われた。自分は利用者の本音を真剣に聞いたことがあったのか。いや、そもそも利用者が本音を話せる態度を見せていただろうか。利用者の本音を聞けば面倒くさい事になる。面倒な事から避けるため無意識に扉を閉め逃げていたかもしれない。小久保さんや藤田さんの今の状況を招いた原因は我々なのか。

「最後まで聞いてみたくなってきたわ」古賀が呟くように言った。

「そうですよ」塚本が古賀に言った。「最後まで聞く責任を感じます」

「馬鹿言わないで」二階に戻ってきた佐藤が古賀と塚本の言葉を否定した。佐藤は険しい目つきで小久保を見据えていた。

小久保は佐藤がステーションから自分を射竦めるような目つきで見ているのに気がついた。小久保は佐藤から目を離さず言葉を続けた。「そして私のように、施設の方針に対して声を大にして異を唱えれば、私は連中から和を乱す者としてマークされ、常に私の言動は

監視されるだろう。まるで世間の治安を脅かす過激派のように」

「もう駄目」佐藤も小久保から目を離さずに言った。「あんな大きな怒鳴り声を続けていたら、他の利用者が不穏になるわ」そう言うと、塚本に顔を向けた。「もう三時を過ぎてます。塚本君、おやつ準備を続けて」

塚本は黙っていた。上司の指示とは分っていたが、返事を返すことができなかった。張り詰めた空気が漂う食堂におやつを出すことに躊躇した。

「塚本君、私だって小久保さんの話しを無理矢理止めたくはないわ。しかし、今の業務を全うしなければならないの。分るわね。今やることはおやつ提供でしょ」

確かに主任が言うことに間違いはないが……塚本は思った。ここで止めていいのか？

「塚本君……お願い」

塚本はしばらく佐藤を見つめたあとに言った。「はい、分かりました」自分でどうすべきかを判断出来ない塚本は、佐藤の対応に任せることにした。

佐藤はステーションから出て、小久保と藤田がいる場所へ歩き出した。佐藤が小久保のそばに近づくと足を止めた。

佐藤と小久保はしばらく何も言わず、互いに相手を見据えていた。まるで剣道の試合のように相手の顔を見ながら、からだ全体を見る遠山の目付のように次に来る相手の様子を伺っている。

「小久保さん」佐藤が沈黙を破った。「大声で怒鳴るのは止めてください。他の利用者さんが困ってます。これ以上続けるのなら、おやつ提供があなたの演説まがいな発言によりできなかった迷惑行為として報告します。話を聞いて欲しいのなら、あなたの部屋で私が聞きます」

「勘違いしないで欲しい」小久保が言った。「俺は君に話を聞いて欲しいとは思っていない」そう言うと、小久保は視線を食堂にいる利用者に向けると、ゆっくり利用者の顔を見渡した。「私はこの不合理で苦しい施設生活に耐え忍ぶ者達の代弁者となり、ここの生活環境に変革を起こしたい！」

「ちょっと、そんな言い方やめてください！」

小久保は佐藤の言葉を聞き流した。「是非、賛同していただきたい！ 自由を我らに！」

「もうっ！ いい加減にしてください！」

小久保は佐藤に顔を向けた。「ここは発言の自由もないのか」

「とにかく、今の時間はおやつを食べて頂く時間です。あなた達がしゃべり続けたら、皆

さんにおやつを提供できません。これで終わりにしておやつを食べて頂くか、いったん部屋に戻って頂いて、私があなた達の不満をお聞きします」

「俺はなあ」織田が言った。「おやつより小久保さんや藤田さんの話を聞きたいね。今日のおやつは何なのかより、お二人が何を言ってくれるのかに興味湧くね」

「佐藤さん」小久保は冷静な調子で言った。「先ほども言ったが、君に話すことはない。仮に君に私の要求を述べたとしても、君が言える言葉はただひとつ、ノーだ。ノーとしか言えない立場なのさ」

佐藤は返す返事が見つからず、睨み返すのが精一杯だった。

「君と話を続けても埒が明かない。ここの規則を変えられる者と私は話がしたい」

佐藤は返事をせず、睨み続けていた。

小久保は厳しい視線を送る佐藤を見て思った。彼女のプライドを傷つけたようだ。自分でこの状況を対処できない屈辱感を与えたかな。

佐藤は硬い表情を崩さずに言った。「責任者ですね、分りました。介護長に連絡します。介護長は介護現場全体の責任を背負っている方です」

「君達介護職員の統括者か」

「そうです」

「いいだろう。その責任者と話をしてみよう。で、その介護長の名前は」

佐藤はゆっくりとした口調で伝えた。「山口です」